THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY

CTL
Kansai University Center for Teaching and Learning
Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

March 2010
vol.02

教育開発支援センターに期待する

教育推進部長
関西大学副学長 市原 靖久

FDの義務化を契機に、多くの大学でFDを推進するための部局が再編または新設された。本学においても、旧全学共通教育推進機構のFD部門・授業評価部門委員会の活動を継承して、教育推進部のもとに教育開発支援センターが設置された。

センターの活動は、FDの推進に限られるものではなく、広く本学における教育支援体制の構築全般に及ぶとされているが、授業支援や授業評価にかかわる活動は比較的よく認知されているようである。だが、FD推進活動それ自体については、FDフォーラムの開催等さまざまな取り組みがなされているにもかかわらず、必ずしもその内容が学部や研究科に共有されていないように思える。その理由は、センターのFD推進活動が主として全学共通教育にかかわるものであるのに対し、学部や研究科で行われるFDは専門教育にかかわるものだと考えられているところにあるのかもしれない。

しかし、このような対立図式は固定的に理解されるべきではない。センターのFD推進活動は全学的FD体制構築の一環としてなされているものであり、学部や研究科のFDと無関係ではない。学部の専門基礎教育の改善において、あるいは専門教育そのものの改善についても、センターに蓄積されているFDに関するデータやノウハウが一定の示唆を与えてくれるであろう。センターには、全学的なFD体制の構築に向けてさらなる調査・研究を進めていただくとともに、学部や研究科からの相談にも気軽に応じてもらえるような「FDよろず相談所」としての機能も果たしてほしい。

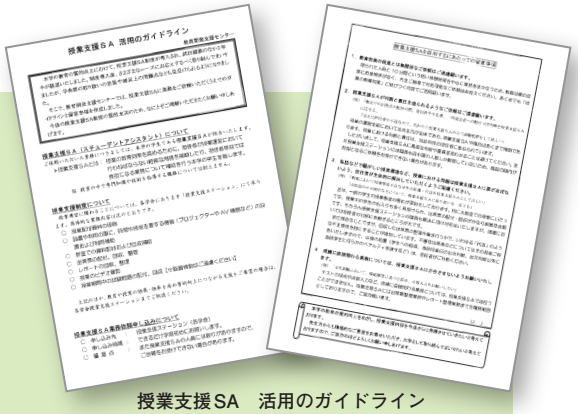
プロジェクト【ＴＳネットワーク】中間報告

目的 本プロジェクトは、平成１７年度から試行的に実施している「ＴＡを活用した授業」の実施結果を検証し、その効果測定をおこない、全学的なＴＡ制度の導入等を検討することを目的としている。
また、授業支援ＳＡ（スチューデントアシスタント）制度について、問題点を明らかにし、改善施策を取りまとめる。

●授業支援ＳＡ制度について

SA研修会（平成20年度春学期）

教務センターの設立とともに授業支援ＳＡ制度が導入され各学舎において運用されている。授業支援ＳＡは授業の教育効果を高めるために、担任者が授業運営において行わねばならない軽微な用務を主に行う。短い休憩時間にプロジェクターの設置や配付資料のセット等の授業準備に追われていた教員からは概ね良い評価をいただいているが、授業支援ＳＡにどこまで依頼できるのかが分からない等の戸惑いの声も寄せられていた。そのため本プロジェクトでは、『授業支援ＳＡ活用のガイドライン』および『授業支援ＳＡを活用するにあたっての留意事項』を策定し全教員へ配付する等、積極的に広報活動を行った。また、授業支援ＳＡ研修制度の検討を行い、全体研修に加えて、初級・上級等の階層別研修や学舎別の研修を実施している。



授業支援SA　活用のガイドライン

●ＴＡ制度について

ＴＡの制度化についてはやや検討が遅れ、従来の試行的な運用を継続的に行っている。ＴＡ制度の輸入元であるアメリカの先進的な事例を調査し、国内にある他大学への実施視察等を行ったが、大学の規模や目的、学生・大学院生・教員の構成比率、設置形態等の差もあり、画一的なＴＡ制度は存在せず、各々の大学に合った制度を手探り状態で行っていることを再確認した。本学の学部教育をより充実させるために教育プログラムに合った独自のＴＡ制度について、引き続き検討が必要と考えている。

●その他の成果

授業支援ＳＡ制度を検討・運用していく中で、新たな可能性とニーズを発掘することができた。それは、全学共通科目「スタディスキルを身につける」等の初年次科目において、過去に受講した経験をもつ学部生を授業の中で活用することであった。我々はこの学生をＬＡ（ラーニングアシスタント）と位置づけた。このＬＡは、初年次学生にとっては、ほぼ同年齢の学生が能動的に学習している姿を示すラーニング・モデルであり、学習の支援を担うファシリテーターであり、スキルを身につけた自らの成長の軌跡を伝えるメッセンジャーとして活躍している。

なお、この新たなＬＡを中心とした本学の取組「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」は、平成21年度文部科学省の大学教育推進プログラムに採択された。

「スタディスキルを身につける」の授業でファシリーテートするLA

●今後の課題

本プロジェクトの今後の課題は、本学の教育を支援するＴＡ･ＬＡ･ＳＡそれぞれの役割を明確にした上で制度設計を行い、各教員が共通の認識のもと積極的に活用していただけるよう学内広報を行う必要がある。

フォーラム・セミナー報告

関西大学第２回ＦＤフォーラムを開催しました。

『思考し表現する学生を育てる－書くことをどう指導し、評価するか？－』をテーマに昨年12月12日、第２学舎 C507教室において第２回ＦＤフォーラム（ワークショップを含む）を開催しました。今回は、関西地区FD連絡協議会と共催し、学内外の大学教員50名以上の参加がありました。大学の種別や規模、学問分野の違いを超え活発な議論が行われ、本テーマへの関心の深さがうかがわれました。また、小講演や事例発表では先進的な取組や教育実践についての発表がありました。

フォーラム開催趣旨

「思考し表現する学生を育てる」ことは、今日の大学教育において、いっそうの重要性をおびつつあります。ところが教員は、思考や表現に関する指導や評価について、いまだ経験則以上のものをあまり持ちえていないのが現状です。

開会の挨拶：
市原靖久 副学長

この問題について本学が幹事校として加盟する関西地区ＦＤ連絡協議会（FD 連携企画 WG）で昨年度シンポジウムを開催したところ、「もう少し議論を深めたい」、「時間をもっとゆったりとってほしい」との意見が多数ありました。そこで今年度は関西大学と関西地区ＦＤ連絡協議会の共催により同じテーマでワークショップを開催することにしました。当日は小講演や事例紹介のほか、参加者同士で各大学・授業における課題を議論するグループワークもおこないました。

事例紹介：三浦真琴 教授（教育推進部）

ワークショップ参加者報告

学生の思考力と表現力を育てるためには

総合情報学部 准教授　牧野由香里

私たち大学教員には、授業づくりについてじっくり語り合う機会はほとんどありません。このワークショップでは「学生の思考力・表現力を育てたい」という願いを共有する大勢の参加者が学内外から集まりました。

前半のプログラムでは文章表現教育の独創的な実践事例が紹介され、後半は分科会にわかれてグループごとに日頃の悩みや工夫を報告し合いました。グループの成果を分科会で深め、それをふまえて全体で議論することにより、授業づくりの課題が見えてきました。

受講生からの発表
尾﨑　史歩
（政策創造学部１年生）

印象的だったのは、参加者が協同的に描いた「思考と表現」の階層構造です。一番下の「人間関係（継続的なかかわり）」という土台に「学習意欲（感情）」や「問題意識（発問）」の層が重なります。その上に「論理的思考（データ分析）」の層が続くのですが、参加者の多くがここでつまずいているようでした。さらに、これらをいかに専門科目と接続するのか？という問いが加えられました。

「思考と表現」の教育は、これらの階層を丹念に積み上げていくことで実現しますが、授業づくりにこれだけ複雑な構造が求められるとしたら、教員一人の努力だけでは限界があるのではないでしょうか。私たち大学教員が自身の「授業力」を高め合うための専門的な教育開発支援が必要になる、と痛感しました。

ワークショップでの議論

教育開発支援センター
活用案内 CTL

昨年10月から教育開発支援センターが第2学舎1号館にOPENしました。
本センターでは、教育開発に関する書籍や授業改善のためのツール（機器）を貸し出しています。その一部をご紹介しますので、是非ご興味のある先生方はご来室ください。その他の書籍等については、WEBページでご覧ください。

書　籍

●高等教育事情を考察する
『高等教育概論―大学の基礎を学ぶ』
有本 章（著）（ミネルヴァ書房）
『大学の教育力―何を教え、学ぶか』金子 元久（著）（筑摩書房）

●ユニバーサル化時代の学生像を把握する
『オレ様化する子どもたち』諏訪 哲二（著）（中公新書ラクレ）
『アスペルガー症候群』岡田 尊司（著）（幻冬者）

●新しい大学での学びの基本理論
『学習科学ハンドブック』R.K. ソーヤー（編集）（培風館）
『「学び」の認知科学事典』佐伯 胖（監修）（大修館書店）

●先進的な教育改善の取組を知る
『授業の道具箱』
バーバラ・グロス デイビス（著）（東海大学出版会）
『学生と変える大学教育』清水 亮 他（編集）（ナカニシヤ出版）

●今すぐ教材作成に役立てる
『マインドマップ　勉強が楽しくなるノート術』
トニー・ブザン（著）神田 昌典（翻訳）（ダイヤモンド社）
『学びのティップス　大学で鍛える思考法』
近田政博（著）（玉川大学出版部）
『アカデミックプレゼンテーション入門―最初の一歩から始める日本語学習者と日本人学生のための』
三浦 香苗等（著）（ひつじ書房）

ツール（機械）

●クリッカー　KEEPAD JAPAN「Turining Point」（子機300台）
●デジタルビデオカメラ
SONY　HDR-XR500V（HDD120GB）（2台）
●カメラ用三脚（1脚）
●ICレコーダー　SANYO ICR-PS501RM（2台）

今期SA活動をふりかえって

SAを始めて

社会学部2回生　**宮元綾子**

SAを始めて約1年がたちました。授業を様々な角度から支援できるSAに、とてもやりがいを感じているため、業務が楽しくてたまりません。こんな私がSAになったことで、特によかったと思うことが2点あります。

1点目は、関西大学に詳しくなれたことです。SAは大学の施設や制度など、窓口対応で学生に問われることが多々あります。そんなとき、きちんと説明できるようになるため、日々大学に関するさまざまな事項を学びます。この学びは自身の大学生活にも非常に活かされており、より充実した毎日が送れています。

2点目は、たくさんの人と出会えたことです。特に、異なった学部や学年の人と一緒に業務をできることが私にとってプラスになっています。

これからも、SAを通して大学生活を満喫していきたいです。

From センター長

1年を振りかえって

教育開発支援センターが実質的な活動を始めて、1年が経とうとしております。この期間に、TAとSAに対する支援体制やその制度の見直しを行うことを目的とした「TSネットワーク」、授業評価アンケートの抜本的な見直しを目的とした「アンケートX」、さらにe-learningを始めとするITを利用した教育改善を推進することをめざした「ICT教育」の3プロジェクトを立ち上げました。徐々にではありますが、活動成果は生まれつつあります。現在、センターでは2名の専任教員が、各プロジェクトを積極的かつ精力的な推進していますが、さらに、4月からは新たに2名の専任教員が加わり、一層強力な活動体制になると確信いたしております。今後、センターの活動をさらに積極的にお伝えしていきたいと思っております。

教育開発支援センター長
化学生命工学部教授
池田 勝彦

THINK × ACT
関西大学
KANSAI UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35　TEL: 06-6368-1513　FAX: 06-6368-1514
http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html

発行日／2010年3月31日　編集・発行／関西大学教育開発支援センター